



『ある神経病者の回想録』の著者シュレーバー(1844-1911)は高位の裁判官であったが、51歳で精神を病み、その後十数年間を精神病院で過ごす。『回想録』はその妄想体験の報告である。妄想の中で、世界はすでに滅亡していた。自らの身体は女体へと変容しつつあり、やがては神の子を宿すのだという。著者は裁判官としての能力を駆使して論理を透徹させ、正確きわまりない筆致でこうした妄想を書き記す。

今回の発表ではフロイトの「シュレーバー症例論」を導きの糸としながら『回想録』を概観し、セクシュアリティ、理性と狂気、パラノイアといったトピックについて考察する。

シュレーバー『回想録』について -世界大崩壊と「女への変身」-

文学部教授 金関 猛

日時:2015年10月23日(金)

17:00~18:30

場所:岡山大学文学部会議室

(文法経1号館2階)

予約不要・入場無料

主催:岡山大学文学部プロジェクト研究
「ジェンダーの多層性に関する領域横断的研究」グループ

お問い合わせ

社文研総務グループ・庶務担当 086-251-7345

松本直子 naoko_m@okayama-u.ac.jp

Denkwürdigkeiten

eines

Nervenkranken

nebst Nachträgen

und einem Anhang über die Frage:

„Unter welchen Voraussetzungen darf eine für geisteskrank erachtete Person gegen ihren erklärten Willen in einer Heilanstalt festgehalten werden?“

von

Dr. jur. Daniel Paul Schreber,

Senatspräsident beim kgl. Oberlandesgericht Dresden a. D.

Oswald Reue in Leipzig.
1903